



<論説>高島秋帆と佐久間象山：  
上書からみた経済思想を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 定義 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002388">https://doi.org/10.24729/00002388</a>

# 高島秋帆と佐久間象山

——上書からみた経済思想を中心として——

藤 井 定 義

## 目 次

- 一、はしがき
- 二、秋帆と象山との関係
- 三、秋帆と象山の経済思想
- 四、あとがき

## 一 は し が き

人間の思想は偶然に生れるものではない。常にその生れ出る何らかの素地、すなわち政治・経済・道徳あるいは生活環境などを必要とする。ことに封建社会の組織の中には、変化をきらい伝統を固持せんとする想思や、固定的因襲的な仕来りが根強く含まれているので、思想は一般に今日よりも一層その素地に左右されることが大きいと考えられる。

本稿で主としてその経済思想を取り上げようとする高島秋帆（一七九八—一八六六）と佐久間象山（一八一—一六四）

高島秋帆と佐久間象山

は、ほぼ時代を同じうした人々であつた。前者は幕末における西洋砲術の先駆者であり兵制改革の先覚者でもあつて、老中阿部伊勢守から「火技中興洋兵開祖」という称号を贈られたことは周知のとおりである。同時にまたかれは、貿易の本質を認識した経済的開国論者<sup>1)</sup>でもあつた。しかし秋帆がこのような「火技中興洋兵開祖」と称せられたり、経済的開国論者として認められるようになったことについては、かれが当時わが国の貿易を一手に引き受けていた長崎会所を實質的に掌握していたといわれる長崎町年寄<sup>2)</sup>の家に生れていたこと、また高島家が長崎奉行の御鉄砲方・砲術師範もかねていた家柄であつたことを想起するならば、かれの思想の生れ出る素地がうなずかれるであろう。つぎに佐久間象山である。かれは「東洋道德・西洋芸術」という思想の持主であり、国防上からの開国論者<sup>3)</sup>であつて、尊王論者でもある。しかしのちに述べるように、はじめは開国論者ではなく、攘夷論者であつたが、時勢の変化と、洋学の研究とをまつてはじめて思想の変化をもたらすのである。象山がはじめ開国論者ではなかつたことについては、まず父の感化をあげねばなるまい。かれの父は名は一学、号を神溪と称し、文においては和漢の学に長じていたといわれ、松代藩侯の側右筆兼表右筆の組頭を勤め、武においては卜伝流剣術の達人であつた<sup>4)</sup>。この父のもとでの生活環境がまずかれの思想の出発点を規定したものである。のちかれは江戸に出て林述齋の門に入り、主として佐藤一斎について朱子学を学んだ。この二つの事実からして象山がいかに進歩主義者として認められているが、その思想の根底において東洋道德思想から離れえなかつたことは、やはり思想が偶然に生れるものではないことを明瞭にしている。ちなみに象山が藩主真田幸貫（松平樂翁の二男）の慧眼によつて江戸の林述齋の門に入つたのは二三才のときであり、かれの思想の基礎はこの時期に一応確立されたものと見て差支えあるまい<sup>5)</sup>。というのはこの朱子学の思想が最後まで抜け切れず尊王論として現われるからである。

本稿ではこのような二人がわが国にとつて幕末という重大な時期において、いかなる経済思想を所持していたか

を、それぞれの上書から貿易を中心に検討し、さらにかねらの経済思想の比較をなし、当時における経済思想上の位置づけをも合せ行つたつもりである。

〔註〕

- (1) 本庄栄治郎著「日本経済思想史」二二二頁。
  - (2) 「町年寄は合議勤番制で、各町の乙名、組頭・日行事（乙名の属僚）・オランダ通事・出島乙名・唐通詞・唐人屋敷乙名・通事目付・諸目利役・長崎会所目付・同吟味役・同会所役人等を支配した。このようにして長崎の民政、貿易等は実質的に町年寄の一団が掌握していたということが出来る。」（有馬成甫著「高島秋帆」三三頁）。
  - (3) (1)に同じ 二二八頁。
  - (4) 大平喜間多著「佐久間象山」一二頁。
  - (5) 金子鷹之助解題「高島秋帆・佐久間象山集」（近世社会経済学説大系）八二頁。
- なお本稿で引用した秋帆と象山の上書および象山の書簡は金子鷹之助解題「高島秋帆・佐久間象山集」（近世社会経済学説大系）による。

## 二 秋帆と象山との関係

秋帆と象山との間には直接的な関係はないが、象山は江川坦庵（一八〇一—一五五）の門下生であり、坦庵は秋帆の門下生であつたから、秋帆からいえば象山は坦庵を介しての門下生ということになる。秋帆と坦庵の師弟関係は周知のとおりであり、ここではただ秋帆がさん訴された時（天保一四年）坦庵がその釈放運動に狂奔し、釈放された時（嘉永六年）には坦庵の邸に引き渡されたことのみ記しておく。秋帆と坦庵の関係は長くつゞき、秋帆の半生の庇護者が坦庵であつたと申してもよいであろう。しかし歿したのは弟子の坦庵の方が秋帆よりもさきであつた。

つぎに坦庵と象山との関係であるが、坦庵は象山の入門を簡単には許可していない。大平喜間多氏の「佐久間象山」<sup>1)</sup>

は、この間の事情を次のように記している。

「天保一三年八月五日、坦庵の門を叩いて入門の志を述べた。門人の柏木総蔵が専ら応接の任に當つたが、何故か東脩（入門料）として置いて来た金百疋は封のまま翌々日七日総蔵が象山邸を訪れて返戻し、且つ入門を断つた。けれども象山はこれに屈せず八日再び江川邸を訪問し、礼を厚うして是非にと重ねて懇請したが、坦庵は飽くまでも拒絶し続けた。翌九日には松代藩士山岸助蔵・片岡十兵衛が藩主の命に依つて江川邸を訪ずれて頼んだが、またもや執拗に拒まれてしまった。しかし象山の西洋砲術を学びたいという志はそれでもなおくじけず、今度は川路聖謨の尽力を乞い、その斡旋に依つて漸く入門が許されたのである。」

なぜ坦庵はこのように象山の入門を執拗に拒まねばならなかつたのであろうか。嘉永三年（一八五〇）七月一〇日の象山の書簡「母に上る」に「江川へ参り砲術習ひ候頃、江川にてはけしからず伝書など惜み候て、中々三年五年にては皆伝など致し候はぬ様子」とあるところから推察すると、坦庵が砲術の秘密主義を採つていたからであるように考えられる。それとともに象山の西洋砲術を学ばんとする意志の堅いことも十分うかがうことができる。

象山はこのように無理に入門したのにもかかわらず（象山の入門は九月七日）、一〇月七日郡中横目役に就任したので帰藩したが、翌天保一四年一月一八日に江戸を出発して伊豆韮山に赴いている。そして「二月六日その業を終り、免許を得て同月二九日に江戸へ帰つて来た」となしているが、しかしすでに引用した象山の「母に上る」の書簡からすれば「三年五年にては皆伝など致し候はぬ様子」とあるように免許に關しては、何か矛盾を感じる。ともあれ入門期間はこのように極めて短期間であつたが、砲術に關する必要性を認めていたことは、入門を再三拒まれながらも遂に許可をえたことでもうかがわれる。また「豆州韮山の江川県令に致出會、はからずもフランス法の火術の談に及び一通り承り候處、是迄世間有來候砲術とは格別の事と被存、先いづれにも彼を知り、己を知り候を兵の本と致し候事故、近來彼にて専らと致し候術を得候て、夫につきて勝を制し候義をも考へ申度、其門に入候て致研究候に益々実用之事どもにて、当今の武備是に過ぐべからずと存候」と赤松氷谷に宛てた天保一三年一〇月の書簡でもその必要性を

十分述べていることでも明らかである。

秋帆はもちろん、象山も右に述べたように砲術の必要性を十分認識した点は同一である。しかし象山は秋帆の砲術に対してはすこぶる批判的であつた。次に示す一、二の史料はそのことを物語っている。

まず弘化二年（一八四五）六月に八田嘉右衛門に贈つた書簡である。それには「西洋火術なども先達て江川殿へ便り候て、その極意と致し候ボンベン等の伝授をも得候へども、西洋火術と申もの中々手広の事にて、其原書を読み発明仕候へば、江川殿心得られ候位の義は僅か高島何かしの伝へ候のみの略々の法にて、西洋軍争実地に掛り候術の百分の一にも足り不申候」と記している。また同四年六月竹本金吾への書簡には「当時西洋銃技を伝へ候は高島四太夫を以て鼻祖と致候、然るに此人、原書を読み候事能はざる人にて、僅かに通詞等の説話を承り、其間に夫迄自身覚えたる荻野流砲術を加味し候て大銃をば打候故に当分の大銃を打銃法は西洋にても無之、又本邸にてもあらず、所謂鶴の如きものにて、少しく眼の開き候者より見候ては、殊の外に怪しきものに御座候」とかなり手厳しい批判を行い、さらに「其上に尚怪しみ候事は」と述べて、銃術についてかれの行つてゐることは、素人でも容易に行われるといい、しかもそのような幼稚な書付を大切になして伝授の秘訣と称してゐるとも述べている。その砲術の秘訣の書付は「西洋にて板行いたし外国へも出し候品」とまで象山は記し、すでに引用した「母に上る」の書簡では「高島の伝書などは見下げ居候」とまで書き送つてゐる。

このような秋帆に対する象山の考えはどちらかといへば感情的なものを含むのではないかと解される。これももとを正せば江川と象山の入門の際の葛藤に原因するのではなからうか。また一面象山の気性の一部が現われているようにも思われる。<sup>3)</sup>

〔註〕

- (1) 大平喜間多著「佐久間象山」六九頁。
- (2) (1)と同じ 七〇頁。「象山は江川坦庵とは意見を異にする所があり、僅々四十余日で退塾した。」(金子鷹之助解題「高島秋帆・佐久間象山集」一八五頁)。
- (3) 「象山ほど自らを高く評価した人も稀である。従つて『余、二十以後乃ち匹夫にして一国に繋ることあるを知る。三十以後、乃ち天下に繋ることあるを知る。四十以後、乃ち五世界に繋ることあるを知る。』と極めて高姿勢に自らの抱負を披瀝している。」(1)と同じ 二頁)。

### 三 秋帆と象山の経済思想

#### (イ) 秋帆の経済思想

嘉永六年(一八五三)といえは秋帆が鳥井耀蔵のざん訴により逮捕されてから一二年目に釈放された年である。社会的には六月浦賀にペリーの艦隊が来港し、七月にはブーチャチンの艦隊が長崎に入港して、開国を要求しているといわが国にとつては開国か鎖国かという重大な時期であつた。

この時期にあつて幕府は「此度の儀は国家の一大事に有之、実に不容易筋に候間、書翰の趣意篤と被懸熟覽、銘存寄の品も有之候はば、仮令忌憚に拘り候共不苦候間、聊心底不明殘可被申聞候」と諸大名に通達した。これに対する答申は大多数が鎖国攘夷論を述べたものであつたが、そうした中であつて、少数ながらも開国論を唱えたものがあつた。秋帆は実にその少数開国論者中の一人であつた。しかもこの上書によるかれの経済的開国論は、この当時における最も進歩した開国思想であり、貿易の本質を認識したうえでの経済的開国論を主張している。さらにこの開国論は、世界経済の流れの中においては必然的なものであつたのである。ここにかれの上書の大きな価値を見出さなければならぬ。またこの上書がいかにかに心血を注いで書かれたものであつたかについては「江川太郎左衛門さえ躊躇し

た意見を毅然として提出した秋帆の態度は、この上書の内容の卓見であることと共に、彼の晩年における最も輝かしい行跡と云わなければならぬ」といふ言葉で明らかであろう。

この年（嘉永六年）の八月に釈放された秋帆は、一〇月にこの上書を書き上げている。ここで注意を引くことは、二年間も幽閉されながらもこの最も進歩した経済的開国論を上書しているということである。この経済思想の萌芽は一体どこに求めるべきであろうか。わたくしは長崎貿易を行っていたという環境をまずあげねばならないと思う。ここにかれの経済思想が生れてきたゆえんがあるといえるだろう。またこの貿易によつてすでに西洋がわが国に優れていたことを見抜いていたことが、開国を実行せねばならないという理由であつたと推察できる。この思想がかれの脳裏に焼き付けられていたからこそ釈放後間もなく上書をしたためるにあつて何んの躊躇もなかつたであろうと考える。しかし天保十一年（一八四〇）長崎奉行田口加賀守に提出した上書には、もつばらアヘン戦争の結果中国が敗北した理由を砲術の劣悪にありとなし、さらにわが国の砲術の無力を述べ「砲術の義は護国第一の武備に御座候」となし、また「乍憚御大方高貴の御方、並御火砲家の御明鑑を以て、理非御取捨被為遊、普く天下の火砲一変仕、実備に相定候様御座候へば、我国の武威弥光揚仕、御治世長久の吉瑞と千万有難奉存候」となすあたりではまだかれの貿易論は見る事ができず、国防的見地から西洋砲術を取り入れることのみを上書している。したがつてかれの思想の變化は幽閉の間に培かわれたものと想像できる。その上当時のペリー、プーチャチンの来航がかれを一そう刺戟したのもと思う。この事實は嘉永の上書に「当年の儀も亜米利加・魯西亞等浦賀・長崎へ渡来仕り、何れも交易奉願候風説に御座候」とか「多年紅毛人共へ応接仕、談話中余事に於て、西俗之情態相伺候儀も有之」などとあることによつて明瞭である。

さて本論に入ろう。まず秋帆のいう貿易の本質から検討しよう。「蛮夷互に有無を通じ交易仕候儀は、彼が国之習俗



常と仕候儀にて、此品を以て彼品に易へ其利潤は互之事にて、敢て一国之利を貪り候と申趣意無<sub>レ</sub>之、交易は各国民を撫育致し候為之儀にて、子細無<sub>レ</sub>之事と手軽に相心得候儀に御座候」と述べている。すなわち貿易は各国民を撫育するものであつて、その方法は自国にあつて他国にないものを交換しあい、その利潤はお互いのことであり、ただ、一方の国のみ利益を得るようなものではないというのである。ここにかれの貿易の根本思想がある。したがつて当然開国し、貿易が必要であることを進言する。

ではこの貿易思想はどこからでてきたかを考えてみよう。かれの貿易思想は長崎貿易における西洋との接触からであつたことはすでに述べたところであるが、その点は上書からもまた推察することができる。

天保の頃秋帆がニイマンという加比丹人と中国について論じた際にニイマンは、「唐国を侵伐して我が有と存候者誠に易き事に御座候、三ヶ年に不<sub>レ</sub>至して欧羅巴之者となし候儀は相違無<sub>レ</sub>之候」と述べ、また「此儘差置有無を交易仕候て、互に利を得国用を弁じ候方宜敷、皆国民を養候為之事に御座候、唐国は大国成といへ共、其之を敢取候儀は易事に御座候」と答えた。その一つの事実が三、四年に至つてアヘン戦争の結果、中国の大敗として裏付けられたことである。当時中国といえはわが国にとつては一大先進国であり、その中国が夷狄視された西洋諸国に大敗するなどおそらく想像もしえなかつたであらう。ここにおいて秋帆は一そう貿易の必要性を痛感したのではなからうか。しかも

「本邦之人情にては、他を学候儀を耻と仕候得共、彼が心得にては他を学候儀を、国家之為力を尽し候者と感賞仕候儀にて、彼は諸国に航海仕、其善成者有<sub>レ</sub>之候得者皆之を取候て、自国の缺たる処に補ひ候、交易利潤を貪候も、国を富し兵を強く致し候為の主意にして、旧習に固陋仕候習俗に無<sub>レ</sub>御座候間、他を学び候儀を聊耻と仕候儀は無<sub>レ</sub>御座候、却て他を学び不<sub>レ</sub>申を固陋と侮候程之儀に御座候。」

と述べているあたりは、国際的視野に立つた秋帆の採長補短思想であり、なぜ開国貿易を行なわねばならないかを如実に述べたものであらう。

つぎに具体的にどのような貿易を行わねばならないかについては秋帆は、

「唐・阿蘭陀代り物に相成候品に銅相除候外都て我が無用之品を以相渡候儀に御座候処、彼国より可<sub>レ</sub>積渡諸品相分候上は、其内必御国益に可<sub>レ</sub>相成<sub>二</sub>品も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候間、御国用に可<sub>レ</sub>相成<sub>二</sub>品而已爲<sub>二</sub>積渡<sub>一</sub>、右代り物には我無用之品を以相渡候時は、全良法の交易と相成候儀に御座候。」

となすのである。無用の品をもつて、必要な品と交換することはたしかに貿易を行う根本的な考えであつて、交換を行う場合の真理である。

しかしかれは貿易に対する純理論のみでなく、その実践家であつた關係上、實際面からも交易の有利なことを述べていることも見逃すことはできない。

「夷国互市之儀は識者之議論も有<sub>レ</sub>之、商売之仕法は不<sub>レ</sub>相弁<sub>一</sub>、銅御渡に相成候儀に付、夷国交易は銅可<sub>レ</sub>相渡<sub>二</sub>事に限り候様存候処より生候説にて、我有用を以無用に易候と而已相心得候得共、銅御渡に相成候は、阿蘭陀にて本方荷と唱候品々銅御渡に相成、時計・硝子器・玩物等之類は脇荷と相唱、加比丹始め私之商売にて、右代り物には我が無用之品を相渡し、人命を救ひ候業種類、専ら脇荷中に有<sub>レ</sub>之候儀に御座候。」

と。これから推察できることは、實際貿易の仕法をわきまえていないものが貿易論を唱えるため、貿易の本質の逆、すなわち有用なものと無用なものとの交換をなす結果、貿易無用論になるわけであつて、かれは決してそのようなものではなく、それを本方荷と脇荷など實際貿易を行つた経験から述べていることで興味を引く見解である。これは同時に一面貿易無用論に対する反駁とも思われるが、このような具体的意見は、秋帆のような貿易を實際行つたものでなくては述べられないであろう。

つぎに貿易を行えば如何なる利益があるか、秋帆の意見をみよう。

「アメリカ・魯西亜等交易願之儀は、程能御取あしらひは相成候方御為に宜敷、商売取組方持渡候品物により候ては御国益も相増

國中融通にも相成、且國中出産之品を以代り物に相渡候時は、庶民生計之基も相増、殊に菓種類之儀は員数少く候間、格別高価に相成候処より、貧民容易に服用も難く相成、空敷性命を亡ひ候も不<sub>レ</sub>少候間、万民御救之御仁沢とも罷成候哉と奉<sub>レ</sub>存候。」

と述べている。この引用文はすでに金子鷹之助氏が「殊に貿易が国内に於ける生産を刺戟し、『庶民生計の基を増す』といふ主張は、封建開国論者の何人も言ひ得なかつた点であつて、茲にも秋帆の開国論の著しく市民的な特徴が現はれてゐるのである」と述べていること<sup>2)</sup>で付言を要しないと思う。

以上秋帆の交易に関する経済思想を取り上げたのであるが、しかしかれ自身これを全面的に主張しているとはいはいい切れない点が一、二あるので触れておきたい。

まず第一に貿易を試験的に二、三年間だけ行い、もし利益が得られなかつたら中止せよという。すなわち「御試之為而三年仮りに交易御免被<sub>レ</sub>仰付、若不<sub>レ</sub>宜事と被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>思召<sub>レ</sub>候はゞ、何時も其節御差止め被<sub>レ</sub>成度奉<sub>レ</sub>存候」となす点である。

第二にはこの貿易論もやはり国防的見地を秘めて論じられている点を見出すのである。すなわち「アメリカ・ロシア等交易奉<sub>レ</sub>願候趣、右交易御許之有無は、乍<sub>レ</sub>恐本邦治乱両端に相係候儀にて、(中略)若彼が願之通御免無<sub>レ</sub>之節は、恐らくは其儘にて相済申間敷、必是より兵端を開き候」(傍点引用者)となし、「交易一向之儀は、凡彼地之風に習ひ、手軽に御取扱に相成候」となすことである。開国して交易しなければ西洋諸国がこのまゝではおかないから、手軽に交易した方が経済的ばかりではなく、国防的に安全であるというわけである。

最後にこの上書の末文を引用しよう。これはいかに秋帆が貿易の必要を痛感していたかを示すものである。

「無用之品を渡、有用之品を受入、殊に彼が強弱を知候一術とも相成、猶交易利益有<sub>レ</sub>之候て、聊といへども海防御入用向に被<sub>レ</sub>差加<sub>レ</sub>候はゞ、御警衛致し御手厚に行届候儀と奉<sub>レ</sub>存候、交易之儀は御免被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候迎、御国体に相係り候儀無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>候得共、万一兵端相開候様之儀にも御座候ては、実に不<sub>レ</sub>容易<sub>レ</sub>次第、是等之儀は多年竊惶を懷候儀に御座候間、不<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>身分<sub>レ</sub>心付候儘、此段書付

を以奉<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>候。」

## (口) 象山の經濟思想

象山の思想の変化は金子鷹之助氏が述べているように「最初儒学的排外思想から出発し、やがて砲術研究、洋学研究を機縁として、国防的避戦論から開国論へと発展した」<sup>3)</sup>のである。具体的にかれの最初の思想を現わすものは、天保一三年(一八四二)十一月「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」である。内容はとくに国防的見地から海防の意見を論じたもので、海防八策はこの上書の中に取り上げられている。かれの完成した思想と思われる上書は文久二年(一八六二)二月旧主幸教へ奉つた上書「内問により文聰公に呈したる意見書」であろう。これによつて「儒学的国体論と欧米崇拜思想、尊王論と開国論との調和ある統一が象山の数十年に亘る研鑽の結論として提示」<sup>4)</sup>されたものとみなされる。この二つの上書の比較によつてかれの思想がいかに変化したかが明瞭になるが、本稿はただ貿易を中心とする經濟思想を考察するのが目的であるので、そこにのみ焦点を合せて論ずる。

さてこの天保一三年の象山の貿易論は貿易否定論である。すなわち

「阿蘭陀唐山同様の義に候とも此の節の場御国用に事缺義候も無之候得えば、年々阿蘭陀へ被差遣候銅の義たに識者は昔より憂を抱き候事に御座候、此上に又イギリスと交易相開け候はゞ益々天下有用の品を以外国無用の品と取替候訳にて、天下の御大計に有御座間敷奉存候。」

と經濟的見地から貿易の損失を解き、明らかに貿易を否定している。またかりにイギリスに対して貿易を許可したならば、次にはロシアとも貿易を行わねばならなくなつてくるので「右の次第に候得ば勞以イギリスへ交易御免の義は相成間敷義と奉存候」と政治的な面からも貿易を否定し、鎖国論を主張しているのである。

しかし「左ればとて一概に御拒絶御座候はゞ必定戦争に及ぶべく」と述べ「戦争に及び候迎も我に勝算たに多く候

得ば深く懼れ候には足らず候へ共、当今の形勢を以て思量仕候に此儘にては我の勝算至て乏しく候様奉存候」となしている。そこで国防上から海防八策を立て、「阿蘭陀交易に銅を被差遣候事暫御停止に相成、右の銅を以て西洋製に倣ひ数百千門の大砲を鑄造諸方へ御分配有御座度事」と上申する。さらにオランダから軍艦を二〇艘程も御買上げになり、また同国から「水軍に鍛練仕候もの測量に長し船を扱ひ候もの等式拾人、船大工十人、大小の鑄砲を造り候職人並に陸戦の陳法に習ひ候もの各五人宛も被招呼候」と技術指導を頼むべきだとする。

この上書において興味を引くことは、一度軍備が充実した以上は西洋諸国は「御武備の嚴重なるに駭き候て自然と闕闕の念を消」すということである。また「要して交易を願ひ候はん等の奸謀十に八九は空しく相成可申候、若又夷人冥頑無知にして畏るべきを畏れず兵を引て交易を要し候等の義御座候共、右の策御取用に相成御武備御整ひ候上は、兵法に所謂立不敗之地と申ものに御座候得ば最早少しも臆すべき義無之、如何様とも正辞を以願筋御拒絶有御座度」と述べていることは、貿易をあくまでも有害なものであるとみなしている結果からであろう。

ここで一応天保の上書から結論を出せば、象山の貿易はあくまでも「本邦の害のみに相成可」となすわけであるが、しかしすでに西洋諸国をもつて技術的にはわが国より先進国とみなしていることは十分に認めなくてはならない。そして国防上から軍備の必要を主張したのである。

では、象山はなぜ貿易を害のあるものとして否定したのであろうか。単に貿易はわが国の有用なるものと西洋の無用のものとの交換という不利な現象のみから否定論が出発したのであろうか。わたくしはここでかれの貿易否定論中にはもちろん右に述べた経済思想すなわち有用品と無用品との交換という考えが大きなウエイトをしめていないとは申しないが、それに拍車をかけたものに中国におけるアヘン戦争（一八三九―四一）があつたことは注意しなければならぬと思う。しかし同時にかれが儒者から蘭学研究へとふみきつた原因もまたここに存するし、また開国論へ進む

べき端初もここに淵源すると思う。

この天保一三年の上書の冒頭に「去る亥年（天保一〇年）引用者）以来イギリス夷唐山と乱を構へ弊に及戦争候趣風聞も仕候」と述べ、「当二月阿蘭陀人より書付申上候始末近日伝聞仕候得ば、唐山弊に利を失ひ福建寧波等の地方既にイギリスの為に陥没仕候」と中国の敗戦を述べている。そして「是等を以推量仕候ても彼れの本邦へ対し野心御座候義は益以顯然たる義と奉存候」となしているからである。ここにおいて象山は国防論を展開し、海防八策を陳情するのである。

アヘン戦争についてのかれの思想は時代は降るが安政五年（一八五八）四月の稿の別紙において明らかである。そこには次のように述べられている。

「唐国之人民、阿片の為に年々夥しく其の害を受け候故に、唐国官府是を嚴禁候は固よりしかあるべき道理に候、然るを英国にて自国の利益に相成候とて和親を結び致交通候国の嚴禁を犯し、人民の残害を顧みず、剩へ容易に手出し難成程に、其船に大砲等致用意、嚴重の手配にて其兇奸を恣にし候由、其不仁不慈無礼無義強盜の所為とも可申候、これを其国にては皇天皇土生靈を愛育し候公共の道に致候歟、英国に此無道有之候上は西洋諸国天地公共の道理を奉行し候とは申すべからず、西洋諸国に於て果して天地公共の道理を奉行し候は、英国に決して此無道はあるべからず。」

これによつて西洋諸国は自国の利益のためにはいかなる手段をも用いるものであるということが象山の心に焼き付けられたことは推察できる。したがつて「英国には本邦と交易の道開け候へば唐国同様追々阿片持渡り売弘め候志願のよし、既に唐国の大国と雖も手出し難成程に手配致し嚴禁を破て奸売を恣にし候へば、小国の本邦にて条約の禁のよく制する所にあるまじく候」となすのも当然であろう。ここにわたくしは象山の貿易に対する否定論の発する全てではないにしても、相当のウエイトがこのアヘン戦争にあつたと思う。

次に安政五年四月の「米使応接の折衝案を陳べ幕府に上らんとせし稿」に入ろう。この上書から推察される象山の

貿易論は、すでに述べた貿易否定思想に曖昧な点が現われているということである。このことはかれの貿易否定思想に変化を生じ、是認思想をかもし出したのであるとみることが出来る。これについて滝本誠一博士は

「著者(象山を指す)引用者)は元来鎖国主義の論者なれども幕府に於て既に貿易交通を許容した以上は、今更ら致し方なしとて、其善後策を唱へ居るが如くなるも、朝廷に於ては又愈々攘斥とあらば、それも賛成なりと述べ、而して又朝廷の勅宣に外国を指して戎狄夷狄などあるは宜しからざる事にて、全体學術技芸制度文章等、何に於ても、我が国より遙かに備はりたる有力の大国に對し、斯の如き称呼を下すことは不都合なりと論じ、又殊に『西洋の貿易理財の術、御取用と御老中様ノ御内ニテ御掛り被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>定、公儀御船ヲ以テ御定額ヲモ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>立、不<sub>レ</sub>断御国ヲ始メ五世界ヲ往来シテ、彼民ト貿易シ、御出方ヲ以テ防海ノ入費、外蕃御接待ノ御用途ニ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>充度儀ト奉<sub>レ</sub>存候』と云ふが如きは、高島秋帆の意見と略々似たる様なれども、象山の説は甚だ不徹底にして、真に開港主義であるや否、甚だ不明瞭なりと云はざる可らず。」

となしている。しかしこの見解は安政五年の上書と次に述べる文久二年の上書と一所にしたものであると思う。そこでわたくしは天保一三年の上書から安政五年の上書へと思想が変化して、そして最後に文久二年の国防的開國論へと進んだものと解する。いい換えれば天保一三年の上書はすでに述べたように貿易否定論であつた。ところがその後蘭學の研究を行い、西洋に対するかれの思想に変化を生じたのである。このことが「象山の説は甚だ不徹底にして、真に開港主義であるや否や、甚だ不明瞭」となされたゆえんであろう。これは安政五年四月の上書によつて明らかであるが、しかしこの時のかれの貿易論はまだ否定論であつたことはすでに引用したアヘン戦争の考え方などで明白である。それが進んで文久二年の上書において変化するわけである。

文久二年九月の上書に入ることにするが、その前に一言触れておきたいのはハルマ開板カクを行おうとしたが不許可になつたことである。このハルマ開板の必要は西洋の學術の必要からであつて、嘉永二年二月の「ハルマを藩業にて開板せんことを陳す」の上書中に「西洋諸國學術を精研し國力を強盛にし頻に勢を得候」て、その結果が中国の敗戦で

あつた。そこでわが国も「四辺皆海にて外寇の来り候はんはいつをはかられざる事にて（中略）、防禦の策は清朝の覆轍を鑑みて、兵法に申所の彼を知り己を知るの義を勉め度事に奉存候、実に彼を知り己を知る上ならでは、防禦の略も定難く、仮令其略立候ても真の用を成しがたく被存候」と西洋の學術の進歩を認め、西洋をよく理解せねばならなため、ハルマ開板を必要とするわけである。これは西洋を理解するうえでの必要から生じたもので、実際には開板は行われなかつたけれども、象山のすぐれた業績であり、同時にかれの思想の変化をもうかがわれるので一言したわけである。

さて文久二年九月の上書になると、貿易の必要性を述べている。もちろん秋帆のように経済的な立場から論ずるのではなく、やはり国防的見地からではあるが、その必要性を重視していることは推察できる。

「皇国を以て外国と比較し候に、氣候の順正なる、米穀の富饒なる、人民の靈慧にして衆多なる、実外に類もなき御国柄と可<sub>レ</sub>申奉<sub>レ</sub>存候、然る所人口の衆多なる程に御国の不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>届候、窃に其故を求めしに、四箇条御座候様奉<sub>レ</sub>存候、其一は遊民多くして、徒らに其財用を耗靡し候に御座候、其二は貿易・理財の道外蕃の如く開けざるに御座候、其三は物産の学未だ精しからず、山沢に遺材あるに御座候、其四は百工の職、力学・器学を知らず、人力限りあるに御座候。」

と当時のわが国の劣悪な条件の原因として四つの理由をあげている。

このうちの二番目が象山の貿易論である。この問題について「私儀本より此節修業仕らず」となしているものの、この上書では貿易の重要性を十分認めている。すなわち「私儀理財の儀学び候事無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候へども、西洋諸蕃貿易の利を以て国本となし候大略は承知罷在候」とまず西洋諸国は貿易をなし、その利益を国の本となしているから、わが国も「是迄の御会計に被<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>立置<sub>ニ</sub>、別に専ら西洋の貿易理財の術御取用ひ」と貿易の必要性を認め、さらにこの方法を用いるべきであるとする。天保一三年の上書中の貿易は「本邦の害のみに相成可<sub>レ</sub>」を思いだすならば、いかに経済思想に変化をきたしたかが明瞭になるであろう。しかし秋帆のように経済上からの貿易の本質などを述べているので



はなく、西洋諸国が貿易の利をもつて国本となしているからわが国もこれを行つた方がよいという程度である。が象山は「御国を始め五世界を往来して彼民と貿易し」と積極的な出貿易を考えていたことは間違いない。また貿易によつて得た利益はどうするかというに「其御出方を以て防海の入費、外蕃御接待の御用途に被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>充度儀と奉<sub>レ</sub>存候」となすのであつて、このことから国防上の貿易であるとみなされるわけである。さらにかれば「皆外蕃に依て御入増に相成候御用途」として、「防海の儀も益御嚴重に無<sub>ニ</sub>御座<sub>一</sub>候ては叶わせられず、就<sub>レ</sub>中御軍艦の数も次第に可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>増、城制の儀も追々被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>改、西洋諸国の如く国内の城を脈絡貫通して、京師辺は別して京師を環拱圍繞して、互に相控援し候様有<sub>ニ</sub>御座<sub>一</sub>度」と述べているように、造艦と西洋諸国と戦えるように築城の費用にあてるべきであると考へている。

以上がこの上書からの象山の貿易思想であるが、ちなみに貿易品は遊民を工職につかせ、かれらによつて品物を製造させるべきであると述べているが、いかなる品物を生産すべきかなど具体的には一言も触れていない。

〔註〕

- (1) 有馬成甫著「高島秋帆」二〇一頁。
- (2) 金子鷹之助解題「高島秋帆・佐久間象山集」七五頁。
- (3)(4) (2)に同じ 一一九頁。
- (5) 滝本誠一編「日本経済大典」第四六卷 三二頁。
- (6) もっとも寛政八年(一七九六)に象山より先に稲村三伯が蘭和辞書「ハルマ和解」または「江戸ハルマ」と称する辞書を編纂している。

## 五 あ と が き

以上秋帆と象山の経済思想を貿易中心に上書から検討したのであるが、根本的な両者の相違は前者は有名な洋式砲

術家で長崎における実貿易の経験から出発したものであり、後者は儒学（朱子学）から出発した尊王論を中心としたものであつたことに注目しなければならぬ。例えば秋帆は「蘭学相開候御国益に相成儀は有<sub>レ</sub>之候得共、心得違仕不<sub>レ</sub>埒之者は一人も承及不<sub>レ</sub>申、却て聖賢之道を学、専ら倫道を明に仕候大塩平八が如き凶賊も有<sub>レ</sub>之候間、聖賢之教も亦侍に足らざるが如くに被<sub>レ</sub>存、蘭学を以て邪道に導候杯申儀は有<sub>レ</sub>之間敷」と、かえつて儒学の方こそ邪教ではないかといわんばかりである。

それに対して象山は儒学者である。儒学でも朱子学であり、そこから出発した天皇中心論者、したがつて尊王論者であつた。ことにわが国を世界で最高なる道德国家として認めていたことが特徴的である。例えば「本邦の儀は地球中比類無之靈慧の国にて（中略）、土壤の豊腴と人民の智能に至り候ては実に諸州に勝れ申候」とか「皇国を以て外国と比較し候に氣候の順正なる、米穀の富饒なる、人民の靈慧にして衆多なる、実外に類もなき御国柄と可<sub>レ</sub>申奉<sub>レ</sub>存候」といつていることによつて明らかであろう。しかしかれも弘化二年頃から蘭学の研究を行い、わが国の科学が西洋におとつている点をあげて、いわゆる「東洋道德・西洋芸術」の一致を主張したのであるが、蘭学研究を行ったからとはいへ、やはりわが国を世界に類のない国体であると認めていることには何ら変化はないのである。

この二人の経済思想を同時代において比較して見るならば、秋帆の方が象山よりも早くから開国貿易を主張したのである。すなわち秋帆はすでに嘉永六年に開国貿易を主張していたのであつて、その当時の貿易是認論の第一人者とみなしてよいし、また当時における進歩的な開国論者であつたともいえる。これに対して象山の貿易論は文久二年であるから、かなりののへだたりがあると思われる。しかも象山は国防的な貿易論であつたことはすでに述べたところである。しかし象山も決して世界経済の流れに無知でなかつたことは、アヘン戦争を、英国の植民主義思想としてすでに予知していたことはかれの卓見であり、かえつてこれを通して貿易論者となるのではなからうか。

以上幕末期における秋帆・象山の貿易を中心とした思想を検討したのであるが、要するにこの二人はわが国の資本主義化を要求した世界資本主義の流れの過程において、秋帆は嘉永年間というまだわが国にとつては攘夷論のほげしい時代の中からすでに、貿易の本質を把握しこの過程に順応したとみなされるし、象山は初めはこの流れを阻止しようとし、後に至つて国防的立場からこれに参加したものと解して大きな誤りはないであろう。ここに両者の経済思想上における価値を認めることができるのである。

(完)